



ピッポ新聞

2009
6
No.244

子どもの本専門店

ピッポ

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

〒424-0886

TEL & FAX

静岡市清水区草薙1-6-3

054-345-5460

雨の季節にはやっぱり

雨の絵本がすてきだね！

雨の季節に入ったが、ここ静岡ではいまだ雨らしい雨は降っていない。この国の良さの一つは、その季節に合った風情というものが感じられることだ。もっとも、それをどんな時にどんなことで感じるかは、ひと様さまだろ。ぼくだったら、この季節は雨のなか農家の人が田植えをする姿である。小雨にけむるなか田圃にかがんで、もくもくと苗を植えている様子こそ雨の季節にふさわしい風景だ。

雨といえば、ぼくには忘れられない経験がある。



『かさ』の表紙 (太田大八・作文研出版)

二十数年ほど前、まだぼくが溪流釣りに夢中になっていた頃のことだ。その頃のぼくは、何かに憑かれたように毎週大井川の源流へ釣行していた。一匹でもひとよりもたくさん、1センチでもひとよ

りも大きなアマゴやイワナを釣りたかったのである。釣果には釣り人の腕前というものも大きい

に関係がある。

たしかに、里の川ではそれがものをいうことが多いが、ぼくらが目指す源流の釣りというものは、余り腕は関係がないのである。一通りの釣り方に慣れていけば、腕前が少々へただって餌や毛針を水の中に振り込めば、イワナは飛びついてくるのである。唯一絶対の条件は自分以外の人間がその溪に入っていないことである。一週間も人の入っていない溪に一番乗りできたら、もうその日の釣果は約束されたも同然なのである。それと、川が増水しはじめて、水の濁りが少し出てきた時と、逆に増水していた川の水が減水途中で、濁りが薄くなってきたときもである。こんな場合にも余り腕は関係ないようだ。

で、あるときぼくと釣り友たちは、台風の接近を好機ととらえたのである。雨の中を車を二軒小屋近くまで乗り入れ、人っ子一人いない大井川に竿を出したのである。予想に違わず形の良いいワナとアマゴが次々に釣れてくる。夢中で釣っていたのだが、気付くと雨足が強くなり、川も増水が目立ってきた。まだ2時間も経っていながったが、相談して竿を仕舞って戻ることにした。

畑雑ダムまでは余り危険を感じることもなく戻ったのであるが、舗装された道路を井川の村に向かう途中で雨足は強烈になり、此の道は道路の左側は川まで高さ二百センチくらいあり、山側は断崖になっている。その山側のあらゆる場所から水が道に向かって噴き出しているのであった。まさに自然が牙を剥いてきたと感じたのである。

(11 ページに続く)

ヒュンキの名作『くちばし』
二つの版の謎をとく

第十二回

米山編集部長の

不思議な文章”

動物学者 今泉吉晴

私は前回(ピッポ新聞5月号)、田中友子氏が福音館書店から刊行した第三作の絵本『どうくはなくて』(ヒュンキ原作、N・チャルシーナ絵、2007年4月)とそのロシア語原本の読みくらべを終えました。一年間にわたり、『くちばし』どれが一番りっぱ? (ヒュンキぶん、藪内正幸え、2006年3月)から『どうくはなくて』と読みついできましたが、原作との比較からかすかすの発見があり、ヒュンキの偉大さに多くを学ぶことができました。ピッポ新聞の編集・発行人である伊藤俊男さんと読者のみなさまのおかげ、と改めて感謝申し上げます。

これらピッポ新聞で読んだ2作品の前に『ネバーランド』誌8巻で読んだ『おしゃべりなもり』(E・シム、N・スラトコフ作、N・チャルシーナ絵、2005年5月)をあわせ、田中氏の三作品をロシア語原文

とくらべ読みしたことになります。ただし、『おしゃべりなもり』については、文章のすべてを対象にすることはしませんでした。というのは、『おしゃべりなもり』はロシア語原本のごく一部の文章を日本で適宜ぬきだして編纂された作品です(「見解」によると福音館書店科学書編集部が選んだということ)。写真1)。

そのような絵本づくりに私は一つの作品としての価値を見ることはできません。誤訳、不適切な書きかえ、それに不適切な書き加えの一部を指摘すれば十分批評になると、考えました。



1 「おしゃべりなもり」
表紙

「E.シム/N.スラトコフ---さく N. チャルシーナ----え た なかともこ----やく」とあります。本来なら少なくとも「福音館書店科学書編集部 編」と加え、「たなかともこ----やく」は「たなかともこ----ぶん」にすべきでした。

私がこの連載を始めたのは、2008年6月号でした。その前年(2007年)の2月に発行された『ネバーランド』誌8巻に、私は『おしゃべりなもり』と『くちばし』どれが一番りっぱ? の批評を書きま

した(『くちばし』40年後の改訳)。それに対して田中友子氏は、『ネバーランド』誌10巻に「反論」をのせ、また、福音館書店は書籍編集部長、米山博久氏による「見解」(「福音館書店編集部の見解」)をのせています。私のこの連載は、それら「反論」と「見解」に対する私の反論(再反論)でもありました。

『ネバーランド』誌8巻の批評で、私は主に田中氏の二つの翻訳作品(『くちばし』どれが一番りっぱ?と『おしゃべりなもり』)について、誤訳と改変が多いことを指摘し、また田中氏と福音館書店の「癒着」を批判しました。批評の内容を誤訳の指摘を中心にしたのは、誤訳が作品の全体におよぼす破壊的な影響(文脈の破壊など)がおのずと明らかになり、批評としての意味をもつと考えたからです。

しかし、『ネバーランド』誌10巻の「反論」で田中氏は『くちばし』どれが一番りっぱ? について、文法的に説明可能であるから問題ない、と主張して、誤訳と不適切な改変が作品の文脈と作品内容、それに原著者ヒュンキの作品意図に多大な破壊的影響をおよぼしている問題にふれない論法をとりました。あわせて、私の批評をロシア語がなっていないと無視することで、自らの訳文に反省の目を向けることを拒否しました(私は今の日本の優秀なロシア語能力をもつ書き手が、名だたる田中氏と福音館書店の作品の批評をする可能性はゼロと冷静に判断して、あえて批評を書きませんでした)。なお、田中氏は『おしゃべりなもり』に

については、いつでも反論を書くと思わなければ、実際には反論を書いていません。私は田中氏が『おしゃべりなもり』について書かないことには（書けないことには）、はつきり理由がある、と見ており、この後の議論で触れます。

この連載で私は、『おしゃべりなもり』を除いた二つの作品の全文の私訳を示すことにより、田中氏の訳がビアンキの作品を伝えていないことを具体的に明らかにして、田中氏に反論（再反論）しました。読者の方々に直接、原作の姿を伝えて、先訳も含めて、それぞれに田中氏の訳を吟味してもらうことが一番の反論になる、と判断したからです。

しかし、そのような方法では最終的な責任をもつ福音館書店の役割に目を向けることができません。幸い福音館書店は、米山氏による「見解」を『ネバーランド』誌10巻に発表しています。福音館書店が自社の出版物についてまとめた論を展開するのはそうあることとは思えず、福音館書店の考えを知る上で大切と思えますので、田中氏の三作品の批評の総括をかねて、連載の最後を「見解」に対する反論で閉めたいと思います。

福音館書店の「見解」

福音館書店を代表して米山博久氏は『ネバーランド』誌10巻に掲載した「見解」の冒頭で、私の批評に福音館書店として回答すべき事項を整理して、こう書いています。

まず、今泉氏があげられた問題点の中には、妥当と思える指摘とそうでないものがあります。また、弊社がお答えすべき問題点を、翻訳者である田中友子氏に帰している部分が多数見受けられます。

翻訳者がお答えすべきことについては、田中友子氏がご自身の反論に書いておられますので、ここでは今泉氏が指摘された諸点の中から弊社が回答すべき部分を明らかにし、その内容について、編集部の見解を明らかにしたいと思います。私ども出版社が回答すべきことは以下の5点と考えます。

- 1 奥付表記、弊社ホームページの記事
- 2 自然科学的視点からの訳文のフアクトチェック
- 3 『おしゃべりなもり』の掲載作品の選定、および構成
- 4 『くちばし』どれが一番りっぱ？』の定本の変更
- 5 『くちばし』どれが一番りっぱ？』の編集部からの注記

私が批評で福音館書店に要求したのは、出版社としての姿勢を正すことであり、刊行した作品の品質を改めて審査すること、そして原著者と読者に責任を持つことです。

すなわち、田中氏の疑問の多い翻訳を絵本として販売し続けているのかという判断と責任の問題です（先訳のある『くちばし』どれが一番りっぱ？』については、先訳の方が優れており、先訳に代えて出版する価

値がないのに、なぜ刊行したのか、という判断と責任の問題です）。また、私が批評を書くまえに福音館書店に伝えたことに対して、真摯に答えようとしなかった出版社のあり方です。私は批評で明確に以上のことを伝えていきます。

右の私の批判と要求に対して、「見解」は明らかに何も答えていません。出版社と訳者の役割り分担を機械的に示して、相互の協力関係を明らかにせず、問題を矮小化し、責任のありかを見えなくする手法をとっています。

それに「弊社がお答えすべき問題点を、翻訳者である田中友子氏に帰している部分」が多数見受けられます」と書きながら、なんと「回答すべきこと」の少なさでしょう！ こうして、私の両者に対するより根本的な批判、すなわち、翻訳出版のあり方と先訳がある場合の翻訳著作権と絵の著作権の尊重の問題などに対する批判をかわしています。

しかも、「見解」のいう弊社が回答すべき部分とは、かなりの程度に訳者の役割、あるいは訳者に頼らなければできない部分を含んでおり、奇異に感じられます。しかし「見解」の内容がどうであるにしても、福音館書店が自社で刊行している本についてまとめた考えを示した文書です。この連載の最後にあつかう十分な価値がありません。

私はこの連載でこれまで、「見解」にはほんのその一端にふれただけでした。そこ

で、私はこの連載の最後の部分を、「見解」の内容を検討しながらあわせて田中氏の三作との関連を考察し、それぞれの作品のなぞ、特に『くちばし』の二つの版の謎をときます。また、問題のある絵本を刊行した責任は最終的には出版社にあるのですから、最後に「見解」をとりあげること、自然に出版社の責任二項目を向けることとなります。

「見解」は福音館書店の責任として、5つの項目をあげました。5項目はすでに指摘したとおり、自社の最終的な責任に触れてないなど、明らかに不十分ですが、まずはどんな内容かを見ます。

「見解」は『ネバーランド』誌の見開き2ページにおさめられたもので文書量は多くなく、貴重でもあるので全文を順を追って紹介するつもりですが、最初からみるのでは退屈します。まず、小手調べに文章が短くて論理のほころびが目立ち、「見解」の性格と、それが何のために書かれたかも見てとれる、2つ目の項目を見たいと思います。

米山氏は「福音館書店編集部の見解」（以下「見解」と略記）の「2」に、こう書きました（「見解」は2008年4月に発行された『ネバーランド』誌10巻に掲載。書籍編集部長はその当時の役職）。

『おしゃべりなもり』9頁の「モグラ」と、『くちばし』どれが一番りっぱ？』15頁の「もぐっていききました」という記述に関しては、翻訳者が元々正確に訳していた訳文を現在のように変えていた

だいたという経緯があります。編集部の方アクトチェックが不十分であったことからひきおこされたミスリードであり、今泉氏の指摘はもつともなので、今後版を改める際に直してゆきたいと考えています。（写真2）

2 「見解」
『ネバーランド』誌10巻p252より

2 自然科学的観点からの訳文のファクトチェックについて「おしゃべりなもり」9頁の「モグラ」と、『くちばし』どれが一番りっぱ？』15頁の「もぐっていききました」という記述に関しては、翻訳者が元々正確に訳していた訳文を現在のように変えていたという経緯があります。編集部のファクトチェックが不十分であったことからひきおこされたミスリードであり、今泉氏の指摘はもつともなので、今後版を改める際に直してゆきたいと考えています。

以上は「見解」2の全文です。私の指摘を「もつとも」と認めたものの、今すぐではなく次の版の印刷の際に訂正する、と限定付きの約束で、すでに購読した読者、それにいま、購読しようとしている読者は救済されないわけで、あまりに無責任な発言です。それに「直してゆきたい」といつても、どう改めるのか具体的に示さなければ、本当に理解してあらためるのかどうか、責任のある回答になりません。それに、福音館書店は小さな誤植一つでも回収していることを考えると、すぐに直さないと回収して訂正するのは沽券に関わるとでも思っているのでしょうか。誤訳の重要度を低く見積もって、読者に対する訳者の責任も軽いと勝手に決めていて、ともいえます。しかし私たちは、「見解」が福音館書店の

「回答すべきこと（責任）」として2、すなわち「自然科学的視点からの訳文のファクトチェック」による誤訳の責任を無前提にあげていることに、注意する必要があります。つまりは誤訳の責任は出版社にある、とすんで認めたことになり、その理由として「ファクトチェック」なる聞き慣れな

い言葉をもってきました（米山氏のいうファクトチェックとは、校閲の一種と思うのですが、その内容については後で触れます）。訳文にはあくまでも訳者が責任を持つべきで、変則的であり、特別な救済措置と思われ、本来の意味で訳者のためになりません。

誤訳は編集者の責任なのか？

順を追ってみていきましょう。重要なのは、私の「指摘はもつとも」という記述の前に、「翻訳者が元々正確に訳していた訳文を現在のように変えていた」という経緯があった、と私たち読者には知りようのない、きわめて重要な事実がはつきり記されていることです。いったいなぜ、何のために編集者（ファクトチェックを動物

学の専門家がしたのなら、不十分というのは変です）は田中氏の意思ではないのに、訳文を変えて誤訳になるほどの変更をさせたのか、その事情も含めて明らかにしてくれなければ、にわかには信じがたい重大事です。

そして、もし本当にそのような事実があったというなら、福音館書店はまず田中氏と読者に謝罪し、直ちに本を回収して訂正し、読者にとどけるのが訳者と読者への責務ではないでしょうか。

しかし、そうはしていません。となると、そもそもファクトチェックで文章を変えさせたことが出版社の責任なのか、という疑問が頭をかすめます（編集者がファクトチェックする、というのも変です。通常の編集作業として訳者にアドバイスしたのではないかと、と思えます）。私はじつさい、科学書編集長から、編集者が田中氏の文章を変えさせたと問題になっているが、編集者から言われて文章を変える訳者の方がおかしいことになる、と聞いています（つまり社内的には通常のことだが、特定の訳者との間でトラブルになっている、という意味でしょう）。

科学書編集部の全体も、それは編集者の責任ではない、と考えているようで（私は2008年2月当時、科学書編集部が「見解」の内容を認めていない、と聞いており、このことと関係している可能性があります）、米山書籍編集部長が書いた「見解」2には、部外者には分からない社内のかなり複雑な対立が（訳者との利害関係を含めて）反映

されており、「見解」を書いた主な目的はどこか別にある可能性も考えておかねばなりません。

しかも、この文章には「2 自然科学的観点からの訳文のファクトチェックについて」という題名がつけられていて、「見解」の要点を構成する5点の文章のうちの二番目におかれた重要な項目です。それに、編集者が訳者に行った単なる恣意的な押しつけではなく、「自然科学的観点からの訳文のファクトチェック」が「不十分であったことからひきおこされたミスリード」というのです。

そのまま受け止めれば、自然科学の概念は普遍性をもつが、その概念内容が誤っていた（不十分であった）ために訳文の修正がかえって誤訳を導いた、という意味でしょう。それならたとえ密室における強制であろうとこの成り行きを明快に推論できま

す。モグラの件に関しては、もともとネズミと訳してあったのを、編集者の種々の概念が不十分で、ネズミをモグラにミスリードし、また、ハシビロガモに関しては、食物獲得行動の理解が不十分で、水に潜らないのに潜るとミスリードしたのです。

自然科学はミスリードしない

ところが、科学的概念とは誰もがそのとおり理解するのが正しい、と自分で確信をもてるから納得するのであり、誰でも理解でき、納得せざるを得ない特徴をもつのです。ネズミとモグラを混同するような

（どちらでもいいと思うような）不十分な種概念しかもたない人のいうことは誰も納得せず、強制力は働きません。

じつさい、私は「おしゃべりなもり」の担当編集者に電話して、「トガリネズミがモグラを食べるとは本当ですか？」と聞いた友人から、編集者は「トガリネズミがモグラにくらべとても小さい動物であることを知らないようだった」と聞いています。

また、私は別の編集者から「トガリネズミがネズミを食べる、とあっては、ネズミがネズミを食べるようでおかしな印象になるので、モグラにかえることにした」と聞いています。まことにたわいのない会話で、誰の責任というほどの内容ではありません。つまり、「自然科学的観点からの訳文のファクトチェック」とは無縁の話によつて誤訳が導かれた可能性があるのです。それを訳者の責任ではなく、編集者の責任とどうしていえるでしょう。

また、食物獲得行動でカモが潜るか潜らないかは、科学的な概念思考で推論することとはもともと十分にはできないことであつて、事実の確認（観察）という経験の世界の問題であり、誰か確かな専門家に聞くほかない、ということにならざるを得ません。

もっとも今日ではハシビロガモも都市の公園で間近に見ることができ、鳥に聞いた方がはるかに確実に容易です（ただしこの種の参考意見は、ロシア語原文の記述がいまいではつきり判断できない場合に参考にする、ということであつて、科学的な記述だから何でもファクトチェックにたよら

なければ訳せないわけではないのは当たり前です)。

私は米山氏に直接、何があったのか聞きました。すると、「訳者とは(編集者が)年齢差もありましたから」と、自然科学的観点からの訳文のフアクトチェックとは、まるで別のことを示唆されました。フアクトチェックは隠れ蓑という印象を強くもちました。

福音館と訳者の連携

「見解」2について私はすでに、『ピツポ新聞』7月号、P9でふれました。そこで私は、「見解」が、すすんで誤訳の責任を引き受ける形になっていることから、「厳しい交渉が訳者と福音館書店との間にあったと推測します」と書きました。すなわち、お互いの責任のなすり合いがあったすえ福音館書店が押し切られた、と推測したわけですが、以上の検討からフアクトチェックがていをなしていないこと、基本的にフアクトチェックは読者のためのものであることから、この推測はますます真実度をまし、本当にあったことと思えてきます。

このように「見解」の批判を、一見なんの変哲もない2から始めたのは、この文章が福音館書店という出版社の危機管理の極端な弱さを見事にあらわしているからです。文章を読んで、福音館書店は正直に誤りを認めているのだから、良心的ではないか、と思われたかもしれませぬ。しかし、私はかつて科学書編集長からカモの潜水につい

ては、私の批評だけでなく読者からも投書があつて、編集部としても問題を把握していた、と聞いていました。

2の「翻訳者が元々正確に訳していた訳文を現在のように変えていただいた」という文章を初めて読んで、どこか納得できないものを感じました。つまり担当編集者が訳者(田中友子氏)に文章を変えていただいた、というのですから、訳者の了解を得て訳文を変えた(あるいは訳者は抵抗したが強制した)という意味でしょう。でもそうだとすると、いったい誰がそんなことをしたのか、もし強制しようとしたとして、どうして田中氏が納得したのか、という問題です。

「変えていただいた」のは、「モグラ」と「もぐつていきました」の二カ所です。まずは今すぐに私が、「見解」を軽卒に書かれた文書と実証できる後者、「もぐつていきました」をとりあげます。

いったい米山氏は「元々正確に訳していた訳文」とはどんな訳文か、ご自分で田中氏の訳文の原稿がゲラにあたって、しかと読んで確かめたのでしょうか? それに、正確な訳とは何をもつて判断しておられるのでしょうか。まさか、私の訳と同じ意味の訳なら正確とみた、とも思えませんが、「今泉氏の指摘はもつともなので」というのですから、私の訳を正確とする判断基準があつたと思えます。

私は多くの誤訳を指摘しています。それなのに他の誤訳の指摘は無視し、この部分にかぎってなぜ私の訳が正確と、米山氏に

分かつたのでしょうか?

仮に、保存されている田中氏の原稿がゲラを米山氏が実際に読んだというなら、そこには正確な訳ではない現に印刷されているのと同じ誤った訳文が書かれていたはず。なぜなら、この部分の訳について田中氏は「見解」と同じ『ネバーランド』誌10巻に掲載された「反論」で、こう書いているからです。

「くちばし」に登場するハシビロガモは潜水型のカモではない。だから新訳の「・・・頭から池に潜つていきました」という訳は間違いで、「水に頭をつつこんだ」という意味に訳すべきだという今泉氏の指摘(p142上)は正しい。B版でこの後に続く一節にある「ヴィヌイルヌチ(潜つたのち水面に浮かび上がる)」という動詞にひきずられておかした過ちだが、これについても機会があれば改めたい(『ネバーランド』誌10巻、p231)。

田中氏は私の解釈が正しい、とまるで神のご宣託でもあるかのようにいいますが、誤訳をした本人の言葉として不謹慎です。田中氏にどうして、私の訳が正しいと分かるでしょう。ご自分の訳が間違いであると気づいたのはいいとして、私の訳はハシビロガモが水にくちばしをつけて、水面に浮かぶ微小な食物を水ごとくちばしにすくいとつた、という意味を含んでいます。田中氏が私の訳のおかげで、原文の本当の意味

をとらえることができた、というのなら、そのように想像力豊かに受け止めることができた、と書いて初めて私の訳が適切であった、たった今わかった、と喜びを伝えることができます。

重大な誤訳をしたうえ、他人の訳をみて、ただ「正しい」などというのは、内容が分かっていない口先だけの言葉と思われるも仕方ありません。私が先に米山氏の「直してゆきたい」という訂正の意思表示に対して、具体的にどんな文章にして訂正するかを示さなければ、責任ある回答にならない、といったのと同じことがここでもあてはまります。

田中氏のいう「機会があれば改めたい」では、印刷された版はそのまま読者にとどけられてしまいます。それで翻訳家として読者と原著者への責任が果たせている、といえるのでしょうか。福音館書店と相談して、それでもかまわない、と合意した上の言葉であることは明らかです。しかし米山氏の書いていることとの対比からいうと、この箇所については、原稿の段階から間違っ

米山氏がないものを

あるとした意味

すなわち、米山氏のいう「元々正確に訳していた訳文」は存在しません。にもかかわらず、正しい訳文があった、と米山氏が書いたのは、この箇所の誤訳ではない別の

誤訳についての責任の取り方に関して、ファクトチェックが原因とする訳者との合意があったのを取り違えたことを指しているように思えます（その誤訳は、どこに紛れ込んでいるのでしょうか。あるいは田中氏がまだ反論していない『おしゃべりなもり』のいくつかの誤訳でしょうか）。

米山氏は幹部社員として、担当編集者ばかりか自社にとって不名誉な訳者への干渉を認める前に、当然しなければならぬ最小限の確認を怠ったことになりませんが、そもそもごまかす処置ですから、確認する必要もなかったのです。しかし、そのことが「見解」にほころびをつくって、ごまかしがあったことを私に伝える結果になりました。

では、米山氏は私の「指摘はもつとも」とどのようにして判断したのでしょうか。そう判断するには、事実として間違いであり、翻訳としても間違い、という2点の確認が必要ですが、米山氏は何らかの形でそれをしたことになりました。前者については、鳥の専門家に確かめるよりありませんが、すでに専門家の確認をとっていたはず（次に示すもう一つの田中氏の文章から明らかです）。

問題は後者で、田中氏に私の指摘の適否を聞くよりなかった、と思えます。なぜなら、他のロシア語の専門家に聞くとしたら、私が指摘したすべての誤訳についても同じように聞いたはずで、私の訳が正しいという判定が多数でたはず。それに、そのような公正な対処をしたのなら米山氏は

そのことに触れ、この問題はもつと簡単に解決したはずで。

「見解」のファクト チェックは目くらし

では、誤訳の引き金になったファクトチェックとはいったい何をするのでしょうか。私は福音館書店から十数点の本を刊行しますが、（自然科学的観点からの）ファクトチェックという言葉を集者から聞いたことがなく、当然、ファクトチェックを受けたこともありません。

福音館書店は、多くの出版社がしている一般的な校閲をしておらず、まして自然科学的な校閲の制度をもっていないからです。編集者が必要な作品を適宜判断して、専門家による校閲をしていて、それをファクトチェックと呼んでいるのだらう、と私は理解しています。

そのようなファクトチェックなら私も、福音館書店が刊行している絵本などを見て、気づいた事実認識の間違いを何回か伝えて訂正してもらっており、私もしたことがある、といえます（明白で重大な間違いであるのに、どうしても直してもらえなかったこともあります）。

そしてまた、その程度のことであればかつて私も、いくつかの出版社の児童雑誌などの動物学的な校閲をしていたことがあり、事実の間違いがとんでもない誤解をまねくことを経験的によく知っています。でも、重要なのはそれらの出版社の場合は、校閲

の仕組みを制度としてもっており、著者が専門家であろうとなかろうと、すべての動物に関する文章を校閲していました。

この場合の校閲とは、表現に問題があるかもしれない、という可能性の指摘であって、あくまでも読者のためのものであり、文章の最終的な責任は著者（訳者）であることに変わりありません。米山氏と田中氏のいうファクトチェックは、お互いの責任のなすりあいという内向きなもので、いかにも不自然です（写真3）。



3 「悪い虫」という表現 「おしゃべりなもり」p8
もし私がファクトチェックするのだったら、このページの「悪い虫」という表現は原著者も使っていないし、今日の理解からいっても不適當ではないか、と意見をつけたでしょう。

私は「おしゃべりなもり」が2005年5月に刊行されてまもなく、友人からトガリネズミがモグラを食べると書いてあるが、間違いではないか、と問い合わせをつけ、その確認のための調査にかかった経緯をピツポ新聞の2009年2月号に書きました。

私はロシア語原本を手に入れて確認しないと何ともいえない、と友人に伝え、そこで

友人は福音館書店に問い合わせせて、最終的には原本も明らかにしたのですが、編集者は原本のコピーは手に入らないでしょうというなど協力的とはいえず、別の友人のついででコピーを手に入れました。

「おしゃべりなもり」は、分厚い原本、森からのニュースのごく一部をぬきとって絵本にしており、その上、訳に誤り、省略、書き換え、書き加えがほとんど全文にわたってなされており、驚きました。私は詳しいメモをつくって福音館書店の編集者に説明して、善処するよう要請したものに断られた、と書きました。

ピツポ新聞2009年2月号では、私は断られた理由は書く必要はないと思い、書きませんでした。ここでの議論では必要です。理由は人間関係で、「おしゃべりなもり」の編集担当者にかつて世話になったから問題になるようなことは話せない、ということでした。福音館書店に校閲の制度がなく、また、自社の出版物に問題が生じた場合にどう対処するかのマニュアルもないことが、このような恣意的な判断の背景にあることは明らかです。

そこで、田中氏が「反論」でファクトチェックについて書いている文章が問題です。田中氏は、誤訳の責任を認めながら、ハシビロガモの食物獲得行動についての文章は科学的なファクトチェックの対象である、と読者に伝えて、こう書いています。

「自然科学をテーマにした作品を専門外の人間が翻訳する場合は、専門家によるリファ

レンスが不可欠だと今泉氏は述べているが（p142下）、福音館書店から出た拙訳はどれも、かがくのほん 部門の出版物であり、当然編集部がファクトチェックしてくれた。新訳も、鳥類の専門家の数回にわたるチェックを受け、ハシビロガモの場面に關しては「全く潜らないわけではないので、よいでしょう」というコメントをいただいた。しかし、その動物にとつて特徴的ではない行動はこの場合適當でなく、上記のコメントを受けとつた時点で考え直さなかつた私の判断ミスである。」

もつともな説明のようですが、事実関係を確かめながら文章を吟味していくと読み手をだます意図をもつて、その効果をよく計算して書かれた文章であることがわかります。まず、事実関係ですが、私が述べたと、田中氏がいう文章が最初におかれています。

田中氏は、「自然科学をテーマにした作品を専門外の人間が翻訳する場合は、専門家によるリファレンスが不可欠だと今泉氏は述べているが・・・」と、「ネバールランド」誌8巻に私が書いた批評の文章のページと段落まで「p142下」と書いて本当らしく「引用」しています。が、私はそのような意味のことは一切いっておらず、逆の提言をしています。私が「p142下」で田中氏のハシビロガモの項の翻訳を批評して書いた文章はこうなっています。

また、カモ類の生態を文献にあたって確

認するといふ翻訳家としての必須の作業をしていないのはなぜか。子ども向けの図鑑にも、水面（採食）カモ類と潜水（採食）カモ類の別は書いてある（『鳥類の図鑑』、小学館、1972年）し、大学図書館ならどこにもある欧米の大図鑑には詳しい（Grzimek's Animal Life Encyclopedia, Van Nostrand Reinhold Co., Vol.8 Birds I, 1972）。

『おしゃべりなもり』で私が指摘した誤訳も、同じレベルのリファレンスで未然にふせげたはずで、科学の本の訳者としてリファレンスなしの翻訳はほとんど不可能ではないだろうか。

私は田中氏ご自身が、たいていの図書館に備えられている図鑑を見て参考にするのが当然ではないか、と述べました。それを専門家に見てもらおうようにすすめる文章に巧妙に変えて反論に使うとは、いかにも論争に慣れた人の老獪で卑劣なレトリックです。

なぜ明白な虚偽を語るのか

しかも、もし私がそれに対して再反論を書けば、すぐに露呈するあまりに大胆な工作です。そこで、このような荒っぽい工作をしても反論として通用すると考えるには条件がいりません。すなわち、私が反論できない場合に限りません。田中氏は私が反論できないことを、すでに知っていた、と思えますが、それは田中氏ご自身が『ネバーラ

ンド』誌編集部に抗議して、私のつぎの執筆をとりやめさせたのですから、何の不思議もありません。

もしそうだとすれば、それほど狡猾な「引用」を含む反論自体、はたして田中氏ご自身が書いたものであるかどうか、それさえ疑わなければなりません。福音館書店の幹部と編集者を含む関係者、一部のロシア語翻訳家たち、そして、『ネバーランド』誌の編集長と社長を含む関係者が、田中氏の「反論」と米山氏の「見解」の執筆をめぐるこうした事情を把握している、と考えられますが、おいおい明らかにしていきたい、と思います。

私がいった意味を逆にしてまで、専門家のチェックが不可欠という印象を読者に与えようとすると、一つでも誤訳はあつてはならない、という書き手の危機感を伝えていきます。なぜ、それほどまでして誤訳をとりつくる必要があるかは、明らかです。この程度のロシア語をケアレスミスではなくて誤訳したとしたら、他に多数の誤訳があつて当然といわれます。

そしてまた、田中氏の私への反論のレトリックは、私のロシア語がとるに足らない劣悪なものであることをあげつらうことに終始して、肝心のご自分の訳に言及するところがあまりに少なく、反論になつていないほどです。

つまり、私に能力がないのだから、批評にも意味がない、と読者に伝える論法をとりました。というわけで、私が適切な訳をしていては反論が成り立ちません。そこで、

私が専門家のファクトチェックが必要、と主張していると嘘をいうことで、ファクトチェックの必要性に重みをつけました。

ファクトチェックに望みたいこと

というわけで、私が「見解」の2を最初に取り上げて明らかになつた事実がそのままの再反論のまとめになります。訳者も訳者ですが、最終的な責任をおうべき福音館書店の米山氏の仕事の軽さが際立つのです。「見解」は何より福音館書店の公式の見解ですから、その性格を大づかみではあつても的確に把握しておくことが、これから「見解」をみていくには必要です。

そこで最後に残つた「見解」の2の文章をプラス思考でみて、本来なら夢のようにありがたいファクトチェックに、私が望むことを書いておきます。「見解」2の最後に米山氏はこう寂しい言葉を残しています。

「編集部のファクトチェックが不十分であつたことからひきおこされたミスリードであり、今泉氏の指摘はもつともなので、今後版を改める際に直してゆきたいと考えています。」

福音館書店で一度もファクトチェックの恩恵にあずからなかつた私としては皮肉の一つもいいたくなります。田中氏は自分が専門家ではないから、専門家の助けを借りたい、と簡単にいいますが、私もシートン

研究の素人です。シートン作品を翻訳して、相談できる人がいたらどんなにいいか、といつも思います。同じようにピアンキ作品を読んでいて、相談できる人がいたらどんなにいいか、と思いました。

そして、福音館書店の米山編集部長は、田中氏に鳥の専門家をつけてくれ、その上、もしその人と相談して間違いを教えられて誤訳をしたら責任までとつてくれるというのです。でも、私ならそんな責任をとつてもらう必要はないから、私の問いに専門家として確かに分かることを教えてほしいと頼むでしょう。



ネズミウドリ
「わたしは トガリネズミよ。あなたがつかまえるのは むしだけでしょ？
でも わたしは カダツムリもナメクジもコガネムシも
それにミミズやモグラだってつかまえるのよ。みんなつかまえて たべちゃうわ。
あなたよりだいじにされたって いいとおもうんだけど」

4 モグラだって捕まえる（「おしゃべりなもり」P9）
もし私がファクトチェックするのだったら、このページの「ミミズやモグラだってつかまえるのよ」という表現は原著者も使っていないし、モグラは明らかにネズミの間違いだから、訂正するとして、でも、「ミミズやネズミ」と同列におかないで、「ネズミ」については特別な場合だと読者に分かるように配慮してはどうか、と意見を述べたでしょう。

問題はこうしたらよかったか、という反省です。せっかくの機会ですので、専門家による科学的なファクトチェックがどうあったらよかったか、今回の事例で検証しておきたいと思います。モグラの件はあまりに

もたわいがないので（写真4）、ハシビロガモの件を例にしたいと思います。すでに見てきたとおり、「もぐる、もぐらない」は、もともロシア語原文の翻訳を丁寧にしたらよいのであって、翻訳上の疑問は訳者ご自身の主體的な問いとして図鑑などの基本的な参考書で調べて自ら判断することです。さらなる問いを育てたらよい問題です。

今回の翻訳は、田中かな子氏の訳にあわせた藪内正幸氏の絵を、田中友子氏による新訳にそのまま使うという特殊なつくり方をとっているのです。新しい訳文と藪内正幸氏による絵との整合性に十分な注意をはらうことが最優先の課題であるのは自明です。

そして、もつとも注意したらいいのは、藪内氏が水面に逆立ちするようなカモの絵を描いていることと、田中友子氏のカモが水にもぐった、という訳文との整合性であることもこれまた明らかです。では、田中氏は（あるいは担当編集者は）、訳文を手にして、藪内氏の絵が、潜水するハシビロガモの姿勢を描いているといえるかどうか、鳥の専門家に問うたでしょうか。

ファクトチェックを受けた経験が少ない訳者には問う余裕がなかったかもしれませぬ。著者（訳者）は一般に、そう頻繁に本書を書く訳でなく、編集者は本づくりの経験をはるかに重ねているのが普通であり、それゆえ、著者の道案内になつてあたりまえです。すなわち、ファクトチェックは科学書編集部の編集者の出番であり、機転をきかすチャンスです。藪内氏が描いた逆立ちして水に頭をつっこむカモの絵は、潜水の

意向運動（潜水を意図した運動パターン）と受け止めることができるかどうか、訳者に代わつて専門家に問うたでしょうか？私も聞いてみたいポイントの一つです。

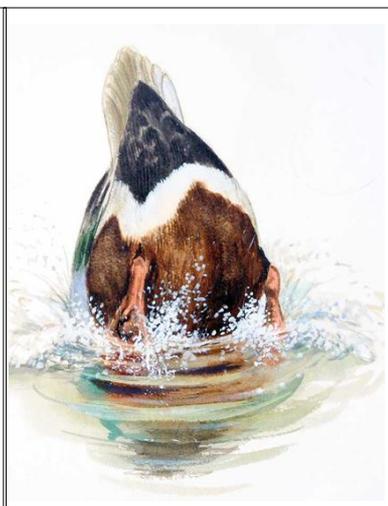
端的にいつて、藪内氏が描いたハシビロガモが水面で逆立ちする絵は、潜水しようとするカモの気迫がありません（写真5）。もし、藪内氏が、食物を求めて潜水するハシビロガモを描いたとしたら、優れた鳥の観察者としてけつして名譽なことではないのですから、当然です。

私は田中かな子氏による先訳もまた、ハシビロガモが潜水したと訳している（私はこの訳の誤りは、日本ではカモは潜水すると一般に受け止められている先入観によるケアレミスと解釈しています）ことに対して、藪内氏は「浅い水たまりの水深近くを探る行動として」あえて描いた、と解釈しています（『ネバーランド』誌8巻、p142）。

もし、訳者が編集者がファクトチェックを依頼した鳥の専門家にこの問題を問うたら、絵に描かれた水しぶきでは、カモは潜水できるほどの力が得られない、と答えてくれた可能性があり、私は訳文を再検討する機会になつたと思えます。

適切なファクトチェックを受けるには、当然のことながら専門家のいうことを受け身で聞くのは十分ではありません。訳者として聞きたい核心は何かを専門家に伝えて、よく話し合うことが何より大切です。そして、それには自分の問いをもつ必要があり、そしてそのためには、図鑑などのど

こども見ることができ資料は訳者が可能
なかぎり調べることが必要です。



5 ハシビロガモの水しぶき
潜水するには相当な推進力が必要なはず
です

今回は「見解」の2の検討で、紙面がつ
きました。ひきつづき、「見解の」残りの
項を見ていきます。

(1 ページからの続き)

車に乗っていて雨水を恐怖に感じたのは、
はじめてであった。

井川の村に着いたときには、ほつとした
ものである。もし三十分撤退が遅れていた
ら、多分戻ることができなかつただろう。
そのときの雨で、道路は崖崩れが起き、半
年近く畑まで車では行けなくなつたので
ある。台風の接近を承知で大井川の源流に
釣りに行くなど、本当に無謀で自然を舐め
ていたのであった。

こんな雨体験は風情などと言えるもので
はないが、雨の季節は意外と自然を身近に
感じるこの出きる季節でもある。

絵本の世界にも 雨の絵本がたくさん

今月は、そのたくさん絵本のなかから、
何冊かを紹介し、楽しみたいと思う。

雨と傘は切っても切り離せない。まずは
『かさ』(太田大八・作 1155円 文
研出版)はいかがだろう。この絵本、初版
から三十年以上経つのに雨の季節になると
店に置きたくなる一冊だ。墨一色それも線
画中心に描かれ、白の部分も多い。素朴な
絵で物語りは展開していく。

ところがこの絵本を見るものを捕らえて
離さない特徴が二つある。墨一色といつた
が、たった一つ、女の子の傘だけが赤で彩
色されているのである。これは太田大八さ
んの手際である。それに伝道しているのだ
ろう。この本には文字がないことである。
女の子が傘をもって、町を通って駅までお
父さんを迎えに行く物語である。町の様子
や女の子のきもちなどほほえましく伝わっ
てくる。

つぎは『あいかさ』(ロバート・ブラ
イト・作 しみずまさこ・訳 840円
ほるぷ出版)。こちらは縦十七センチ横十
三センチと小振りの絵本だが、さきほどの
「かさ」と共通なところがある。こちらも
墨一色で、女の子の持っている傘だけが赤
色である。内容は大分違って、こちらはフア



傘をもって出たが、お日様が照っている。
でもね、ほら降ってきた。赤い傘をひろげ
たらそこに子犬が、子猫がお次は二ワトリ
三羽、次々に動物がやってくる。おや、傘
がどんどん大きくなって……。

お次の絵本も文字がない

『雨あめ』(ピーター・スピア・作 1
470円 評



「雨あめ」(評論社)の表紙
のイメージ画像

論社)庭であ
そんでいた子
どもたちだっ
たが、にわか
雨が降つてき
た。急いで家
の中へ。でも、
この絵本ここ
からが始まり
なんだ。子ど
もたちはレインコートを着て、傘さして、
さあ雨の様子を見に外に繰り出した。そこ
は普段と違った景色が展開していた。兄弟
二人はたのしくなつて、クモの巣に掛かっ
た雨粒に見とれたり、雨樋から雨が勢いよ
く落ちてくる雨水を傘を逆さにして受け留

ンタジーの世界を
たのしめる。今日
は傘持っていた
方がいか迷った
ことは、誰にも経
験があることで
しよう。女の子は

めたり、あれ、今度は道路上を流れ下る小川のつようにな流れににピチャピチャ長くつではいつていつたぞ、雨は子どものおもちゃだ。ピーター・スピアの子どもの気持ちや仕草の表現はとても楽しい。絵本だからこそ楽しみだ!

雨は時には、おともたちと出会いの場を提供してくれる。『かさかしてあげる』(こいでやすこ・作 780円 福音館書店) なっちゃんや野原であそんでいたら、



突然雨がふってきた。木下で雨宿り、そこにありが「かさかしてあげる」でもちいちゃすぎます。おつきはかえるが「かさか

してあげる」でもやっぱりに間に合いません。つきつきどうぶつたちが傘をもって登場。でもね・・・。

雨が降ると元気になる生き物って言えばカエルやカタツムリ。ミミズも元気になるかもね。でも、雨がふるときと困る生き物だっているにちがいない。

『あめがふるとき ちようちよはどこへ』(M・ゲアリック・文 L・ワイズガード・絵 岡部いた子・訳) この絵本も既に三十年を越え43刷を数えている。雨の持ちようちよはどこにいるだろうかと疑問を持ち、

様々な生き物の場合はどうしているか想像



し、ちようちよへの疑問にもどっていくストーリーである。この絵本の良いのは、上から「こうなんですよ」

と答を示さないで、あくまでも読者に「？」をなげかけているところだと思ふな。

さて、ぼくのお気に入りの「雨」の絵本はまだまだあるんだけど、また次の機会に紹介しますね。皆さんのお気に入りの「雨」の絵本はどんなのかな?

ねー、この本読んだ?

『ぴよぴよ』『かつきくけつ』『あっぱは』(谷川俊太郎・作 堀内誠一・絵 各



1050円 くらも出版) この三冊は「ことばのえほん」という副題がついていて、絵本のキャッチコピーには37年振りに甦る幻の名作」とあ

ります。1、「ぴよぴよ」「めええ」など、擬音や擬態語でつづられた絵本。2は、五十音を独特の言い回し綴った絵本。3は、「あはは」「えへへ」など様々な状況でのわらいや涙でつづられている。いずれの巻も堀内誠一さんの絵が光る。

『ちいさなき』(神沢利子・文 高森登志夫・絵 840円 福音館書店)



は大きなものだと当然のように思っているが、芽生えて間もない幼木の存在に思いをめぐらすことは少ない。この絵本はそんなわたしたちに、どんな大木でも草よりも小さいときがあることに注目させてくれる。その対比がちよつと意表を突いていて、面白い。幼子もこれから成長する存在であることも併せて思い至らせてくれる1冊である。

編集後記

「エコ」が、今や世の中を席巻している。「エコ・カー」に「エコ家電」、さー、今がお買い得。「だんな、ちよつと寄ってきな、いい娘がいるよ!」なんて、政府が甘い言葉で誘っているようにぼくには聞こえるが、違ったかな!